

(2) 調査の成果

きたのだ 北野田B遺跡

所在地 豊田市蕪木町北野田地内

(北緯 35 度 1 分 33 秒

東経 137 度 17 分 15 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成
事業

調査期間 平成 28 年 10 月～平成 29 年 3 月

調査面積 1,200 m²

担当者 成瀬友弘 尾崎綾亮

調査経過 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県企業庁より委託を受けて実施した。平成 26 年度の範囲確認調査の結果、2,000 m²が遺跡の範囲に指定されている。今回の調査は南側 1,200 m²を対象として実施した。調査時は排土置き場の確保のため、北側を A 区、南側を B 区として作業を進めた。



調査地点 (国土地理院 1/2.5 万地形図「東大沼」)

立地と環境 本遺跡は、郡界川の支流である蕪木川の東岸丘陵部、東西に走る狭い谷の最奥部西向き斜面に立地し、緩斜面部を中心に遺構が展開している。調査前の状況は、周囲を山林に囲まれた休耕地であった。標高は海拔 362m～368m である。周辺の遺跡として、125m 北西に北野田 A 遺跡、20m 南に北野田 C 遺跡がある。

調査の概要 今回の調査では、中世・近世の遺構を確認することができた。

中世の遺構は、調査区内を北東から南西方向に走る自然流路 068NR の北側緩斜面部(整地面)や流路内に展開する。主な遺構として竪穴建物 022SI や柱穴 048SP、溝 057SD、石組み遺構 171SX、172SS、174SS、175SX などが該当する。

068NR は検出面からの深さが約 2m あり、調査区内での最大幅は約 11m である。埋土はオリーブ黒色粘質シルトを主体とする。堆積状況からは流水性の堆積は確認できない。このことから定期的に堆積土を排出して機能させていた可能性が想定される。出土遺物として、上層では山茶碗(尾張型第 8・9 型式)、壺甕類の破片、下駄、漆椀、木製品の部材と考えられる板材などが出土した。下層では山茶碗(尾張型第 7・8 型式)や曲物の部材と考えられる底板、切込みの刻まれた板材など、上層の出土量を超える加工痕跡のある板材が出土している。上層と下層の遺物の型式に違いがあることから、この流路が長期間利用されながら徐々に埋没していったことが推測できる。

068NR では石組みの遺構(172SS、174SS、175SX)が検出された。172SS は大型の丸太を設置し、その上に人頭大の大きさの石をいくつも乗せて組み合わせた遺構である。石の間から山茶碗(尾張型第 7 型式)が出土している。174SS は 068NR の左岸から約 4m 張り出している石組み遺構である。組まれた石のそのほとんどが平石であることから、流路内で作業するための足場として利用されたことが予想される。175SX は 068NR の左岸から右岸に向けて人頭大の石を列状に設置し、周囲に杭を何本も打ち込んだ遺構である。流れを堰き止めるような状況を確認できるため、堰のような役割を担っていた可能性がある。

堅穴建物 022SI は調査区の東隅 068NR の上流部を盛り土し、整地した平場に構築されている。形状は 2.4m×2.9m の隅丸方形で南隅が 1.2m×0.6m の大きさに突出する特異な形態を呈す。堅穴の周囲で柱材の残っていた 048SP をはじめ複数の柱穴が確認されているが、022SI に伴うものなのかあるいは別の掘立柱建物が存在していたのかは今後の検討課題である。また遺構内で長さ約 2.8m の大型の板材が設置された状況で検出された。出土遺物は山茶碗（尾張型第 7・8 型式）、伊勢型鍋、箸、漆碗、加工痕を持つ板材がある。周辺の遺構からは砥石も出土していることから、木製品を加工・生産する作業場であったと考える。

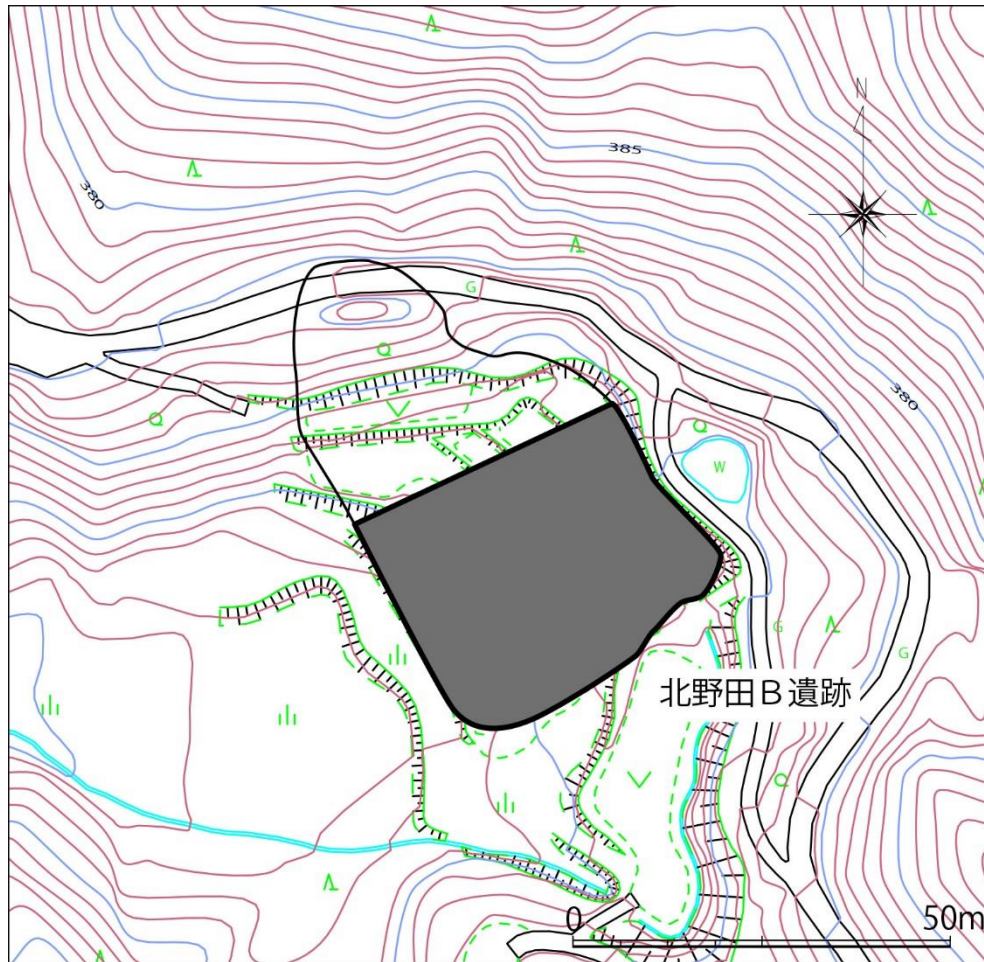
堅穴建物 022SI に近接する西側には、人頭大の大きさの石を弧状に充填させた石組み遺構 171SX が検出された。022SI が構築されている平場と 068NR との境に位置していることから、整地土が流路に流出することを防止する性格を持つと考えられる。石組みの下からは山茶碗（尾張型第 7・8 型式）が出土している。

022SI 埋没後、同じ場所に 057SD が掘削された。溝の西側肩部には石組みを施している。遺物としては山茶碗、陶製羽釜、箸、加工痕を持つ板材などが出土している。

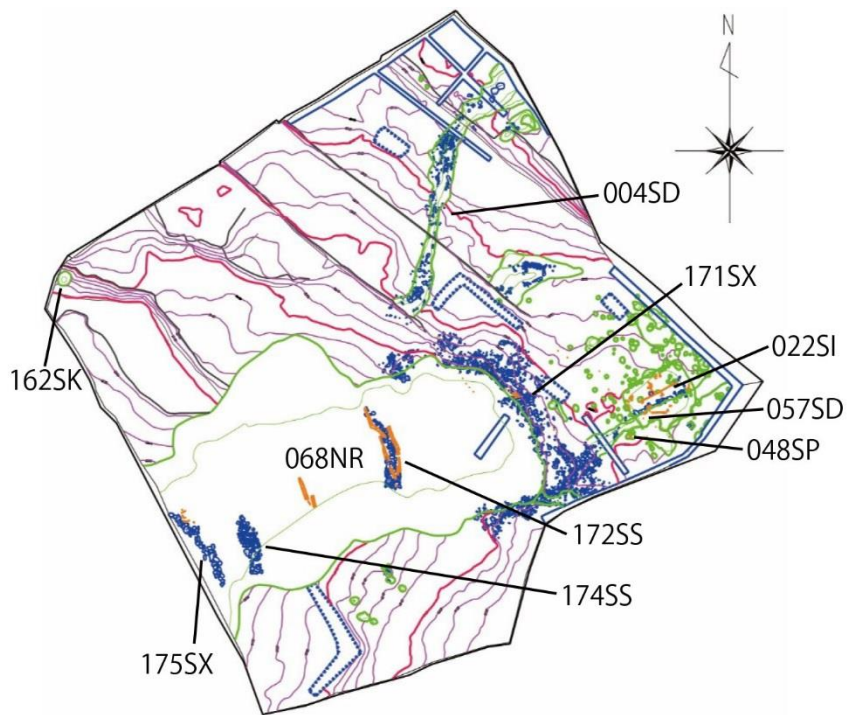
近世の遺構は調査区北側に展開しており、004SD、162SK などが該当する。004SD は調査区外から続き、調査区の北から南に向けて掘削された溝である。遺物は内耳鍋、近世の陶磁器が出土している。162SK は調査区内の最も西に位置する。平面形は長径 1.0m、短径 0.8m の土坑であり、黄褐色の粘質シルトを掘り込んで常滑窯産の甕を据えている。甕の中には大型の花崗岩が充填されていた。

ま と め 下山地区では柿根田遺跡、栗狭間遺跡などで木製品あるいは木製品を伴う遺構を確認しており、木製品の加工・生産が行われていたことが予想されていた。今回の調査では、木製品を加工していた作業小屋と考えられる 022SI とともに大量の木製品を確認することができた。今後得られた貴重な資料を上記の遺跡で出土した資料と比較・検討を行い、山間地での生業の実態を考えていきたい。

(尾崎綾亮)



調査区位置図 (1 : 1000) (トーンの入っている部分が今年度調査区)



北野田B遺跡遺構全体図 (1 : 500)



北野田 B 遺跡 (A 区) 全景写真



北野田 B 遺跡 (B 区) 全景写真



自然流路 (068NR)



自然流路 (068NR) 板材出土状況



自然流路 (068NR) 漆器碗出土状況



自然流路 (068NR) 下駄出土状況



068NR 出土墨書山茶碗



竪穴建物（022SI）完堀状況



022SI 漆器碗出土状況



048SP 柱材検出状況



171SX 完堀状況



172SS 完堀状況